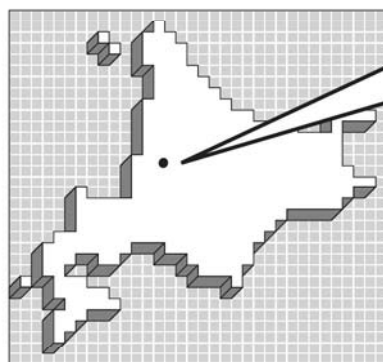




連載 わがマチの自慢 No.11



北 竜 町

— 国民の命と健康を守る 安全な食糧生産宣言の町 —

ひまわりのまちとして知られる北竜町。空知総合振興局管内の北部に位置する人口が約二千人の小さなまちであるが、ひまわり観光で注目されており、開花シーズンには一か月余りの期間に二〇万人を超える観光客が訪れている。

暑寒別連峰の裾野に広がるこのまちは、全面積のおよそ七割が山林であるが、雨竜川など三河川流域の肥沃な土地と、豊かな水資源のもと、「国民の命と健康を守る安全な食糧生産の町」を宣言し、低農薬で安全・安心な農産物の生産に全町を挙げて取り組んでいる。

基幹産業である農業の持続的な展開とひまわりを核とした観光・交流機能の強化を柱とした産業振興がまちづくりの中心に据えられている。

1. ひまわりによる まちづくり

北竜町の町花は「ひまわり」
（昭和五七年制定）である。
取材に訪れたのは八月下旬で
既にひまわりの開花時期は終
わっていたが、市街地に入る



「ひまわりまつり」

とひまわり街路灯や学校や役
場などの建物に描かれたひま
わりのイラストが迎えてくれ
た。

(1) ひまわり栽培の歴史

昭和四四年にヨーロッパ視
察研修に参加した農協職員が、



町民有志によるひまわり畑の草取り

旧ユーゴスラビアのベオグ
ラード空港周辺のひまわり畑
の美しさに感動。また、健康
食品としての可能性に注目し
て帰国。農協婦人部の自給自
足に基づく食生活改善運動と
も連携し、翌五五年から周辺
環境の美化やひまわり油を
搾って家族の健康を守ろうと、
一戸一アール作付運動として
ひまわり栽培がスタートした。

昭和六二年には第一回「ひ
まわりまつり」を開催。

昭和六三年に集中豪雨によ
りひまわりが大きな被害を受
けたことから、観光としての
ひまわり畑造成の構想が生ま
れ、平成元年、農協青年部や
商工会青年部、農協、土地改
良区、役場などが協力して、
国道二七五号線沿いに約六ヘ
クタールの「ひまわりの里」
を整備した。

「ひまわりの里」はその後
も徐々に面積を増やし、展望
台や駐車場、散策路、観光セ
ンターなどを整備し、現在で
は二三ヘクタールの畑に一五
〇万本ものひまわりが植えら
れている。

さらに、まちづくりグルー
プによる「ひまわり迷路」の
開設、北竜中学校の生徒によ
る「世界のひまわりコーナー」
の設置、老人クラブをはじめ
とした多くの町民有志による
「草刈り支援」や「ひまわり
観光ガイド」など町民のボラ
ンティア活動に支えられて
「ひまわりの里」は運営され
てきた。

今年、「ひまわりまつり」
は三〇回の節目を迎え、入場
者数は二六万六千人と過去最
高となった。近年は、多くの
外国人観光客が見られるよう

になってきたとのことである。

(2) ひまわり油の再生

農協女性部が取り組んできたひまわり油の生産は、加工施設や機械の老朽化により平成一五年に中止していた。近年における農家での栽培は、ひまわりが重要な観光資源であることから、水田フル活用ビジョンにおいて地域振興作物に位置付けるなど、景観用として作付けされており、今年は四〇ヘクタール程度となっている。

こうした中、国産の原料を使った食用油の製造・販売を考えていた企業（日清オイログループ㈱）が、北竜町のひまわりに注目。北竜町が総務省の「外部アドバイザー制度」によって招へいした専門

家のコーディネーターにより、この企業と町・農協・商工会・観光協会が連携して「ひまわり油再生協議会」を今年一月に設立した。

ひまわり油再生プロジェクトでは、地方創生交付金を活用し、本年度から搾油用ひまわり品種の試験栽培、油の試験製造・販売に取り組んでいく計画であり、栽培から搾油（原油）に至るまでのシステムづくりをはじめ商品開発やマーケティングなどの検討も進めていく。

このプロジェクトがひまわりを活かした特産品の開発や雇用の場の確保、都市と農村の相互理解と交流人口の増加など地域の活性化につながる取組みとなるよう注目していきたい。

(3) ひまわりブランドの特産品

北竜町では観光資源のひまわりの知名度を活かし、

「ひまわりライス」、「ひまわりメロン」、「ひまわりすいか」など、「ひまわり」の名をつけて農産物の品質の向上や販路の拡大に取り組み、特産品として育ててきた。「ひまわりまつり」期間中に営業する観光センター、道の駅「サンフラワー北竜」の売店や隣接する

←農畜産物直売所「みのりっち北竜」

↓「ひまわりメロン」
「ひまわりすいか」



農畜産物直売所「みのりっち」には、こうした特産品に加え、季節ごとのさまざまな野菜や花、そばや黒千石大豆とその加工品、農家のお母さんたちが加工したみそや漬物の素、もちや笹たんこなどが並べられ、訪れる観光客などに販売している。直売所には、農家のお母さんたちも交代で店頭立ち、特産品の魅力を紹介したり、消費者の声を直接聞くなど消費者との交流を深めている。

2. 安全・安心な食糧生産に向けた取組み

北竜町は、平成二年一二月に「国民の命と健康を守る安全な食糧生産の町」を宣言した。特に、基幹作物である水稲については、生産者全戸が

農業を削減した栽培の徹底と生産情報のトレーサビリティシステムを取り入れ、消費者から信頼される安全・安心なお米として「ひまわりライスのブランド化に取り組んできた。

(1) 低農薬栽培の取組み

町を挙げて農業を削減する取組みを始めたのは、農協青年部が消費者との交流を進める中で、九州の生協から除草剤を全く使用しない稲の栽培を相談されたことが大きなきっかけとなった。青年部では、昭和六三年から除草剤を使用しない栽培を試み始め、この年の農民集会にこの種の集会では異例ともいえる「安全な食糧生産に関する決議」を提出、この決議が採択され

た。平成二年には、町、土地改良区、農業委員会それぞれ安全な食糧生産を宣言し、町一丸となった低農薬栽培の取組みに弾みをつけた。

平成一六年には、水稲を栽培するすべての農家がうるち米生産組合（後の「ひまわりライス生産組合」）に加入し、栽培協定により使用する農薬を統一。一七年からは、化学合成農薬について、北海道で一般的に使用されている農薬の成分使用回数二二回を一一回と半分にした減らした栽培に取り組みだした。

病害虫の発生状況により、農家やほ場によつては一一回を超えざるを得ない場合もあ

るが、農協支所担当者の話によると、昨年で八割程度が達成できているという。

また、ひまわりライス生産組合では、今年から、中央農業試験場が育成したいもち病に強い品種である「きたくり



J A北竜支所隣の米調製貯蔵施設

ん(空育一七二号)」を使って、農薬の一般的な使用回数二二回を八割カットした四回による栽培も始めたところだ。

(2) 「生産情報公表農産物JAS規格」の取得

さらに、「ひまわりライス生産組合」では、こうした農薬を減らして栽培した米を消費者に安心して食べてもらうこと「生産情報公表農産物JAS規格」を取得し、米の生産者やほ場の位置、使用した農薬や肥料をホームページで公開している。

「生産情報公表JAS規格」は、平成一三年のBSEの発生や食品の不正表示事件を背景に、消費者の信頼回復を図る方策の一つとして、JAS制度においても、生産者等が

食品の生産情報を正確に記録・保管・公表し、消費者に正確に伝えていくことを第三者機関が認定する仕組みを設けたものである。平成一五年には牛肉、一六年に豚肉、一七年には農産物についてこの制度が導入された。

北竜町ひまわりライス生産組合はいち早くこの制度に対応することとし、平成一八年に事業者(生産工程管理者)



ひまわりライス

としての認定を受けた。米の栽培で、このJAS規格を取得している生産者の組織は、全国でもひまわりライス生産組合だけのことだ。

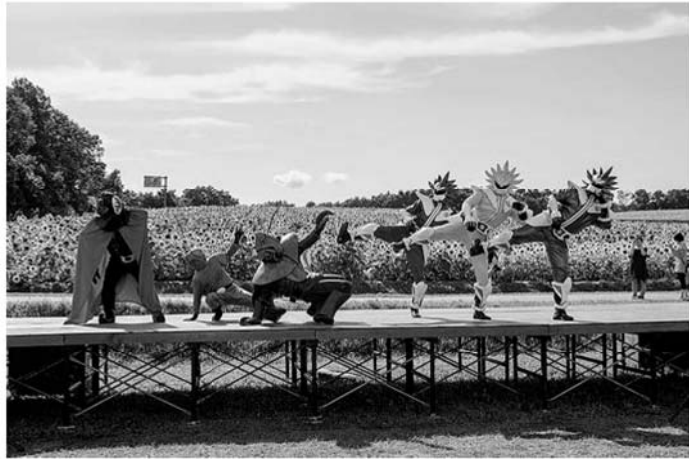
このJAS規格を取得したことで、消費者には生産履歴が明らかであることを付加価値としてアピールできることになった。その一方で、公表する生産履歴情報に誤りは許されないことから、生産者における正確な記帳と生産組合における確認の徹底、収穫や乾燥・調製作業の細かな仕分けやコンタミの防止など果たすべき責任も大きい。ひまわりライス生産組合では、こうした取組みを一丸となって進めている。

(3) 戦隊ヒーローを起用した特産品のPR活動

「ひまわりライス」や「ひまわりメロン」、「ひまわりすいか」など特産品のPR活動に活躍しているのが、ご当地戦隊ヒーロー「アグリファイター・ノースドラゴン」である。

農協支所の担当者がこの構想を農協青年部に持ち掛けたことが発案者の意図を大きく超えて展開した。農協青年部のメンバーは、この戦隊ヒーローを農産物のPRだけではなく、人口減少が進む中で、職業や世代を超えて北竜町を盛り上げようと商工会青年部や役員職員にも声をかけたのだ。こうして二〇〜三〇歳代のメンバーからなる「チーム・ノースドラゴン」が誕生

戦隊ヒーロー「アグリファイター・ノースドラゴン」



した。今では、農協青年部や商工会青年部、農協や役場の職員など六〇名を超えるメンバーが参画し、まちに対する熱い想いを胸に、業種を超えて一体となって活動している。

この「ノースドラ

ゴン」の活動は多方面にわたっている。

戦隊ヒーローショーを通してひまわりライスなど特産品のPRを主体に、各種イベントへの参加による北竜町のPR、町内のさまざまな催しへの出演による各種の啓発活動などだ。

また、子供たちのふれあい行事にも積極的に出向き、子供たちにこのまちをますます好きになってもらいたいと奮闘している。

ヒーローショーのストー

リーも自作であるが、「太陽とひまわりの戦士」、「恵みをもたらす水の戦士」、「豊かな大地を育む土の戦士」の三戦

士が、米をエネルギー源として、稲の病害虫や雑草をイメージしたキャラクターの敵役と戦うなど、農家の米栽培の苦労や食べ物の大切さを伝える内容となっており、食育の役割も果たしている。

3. 生産が減少している「ひまわりメロン」、 「ひまわりすいか」

北竜町の特産品となっている「ひまわりメロン」や「ひまわりすいか」は、作付面積が大きく減少してきている(表)。農家戸数の減少や担い手の高齢化が進む中で、一戸当たりの経営面積が大きくなり、こうした作物に手間がかけられなくなってきたのだ。町や農協では栽培面積を維持・拡大しようと、ハウス資

材の導入に対して高率の補助制度を設け、生産者を支援している。

メロンやすいかは、水田転作を進める中で、米に代わって収益をあげる作物として導入され、産地形成やブランド化を進め、市場等からも一定の評価が得られるようになった。今後、さらなる農家戸数の減少、一戸当たり規模の拡大が想定される中、こうした作物の生産を維持するためには、地域として担い手や労働力の不足に対応するシステムづくりや新たな担い手を呼び込むことを具体化していくことが求められる。

町では、新たな担い手を増やすため、農業体験実習生や新規就農希望者に北竜町を訪れてもらおうと「新農業人フェア」に積極的に参加して

表 北竜町における主要農作物の作付面積及び収穫量の推移

(単位: ha、t)

区 分		平成5年産	15年産	25年産	26年産	27年産
水 稻	作付面積	2,390	1,880	1,870	1,880	1,880
	収 穫 量	7,450	8,450	11,200	11,800	11,200
小 麦	作付面積	104	114	109	99	113
	収 穫 量	188	321	344	296	553
大 豆	作付面積	6	40	229	213	223
	収 穫 量	12	81	340	386	480
そ ば	作付面積	44	295	549	501	476
	収 穫 量	37	274	283	197	289
メロン	作付面積	73	28	13	-	-
	収 穫 量	1,560	648	295	-	-
すいか	作付面積	6	17	8	-	-
	収 穫 量	281	660	355	-	-

資料：農林水産省「作物統計」

注：メロン、すいかの調査は25年産まで

いる。農業体験実習では女性用ではあるが、既存の施設を改修して三名が宿泊できる施設を整備し、昨年から利用している。

現在、ひまわりメロンやひまわりすいかの栽培に取り組み、二名の若者が農家で

の研修に励んでいる。来年度以降、町内で就農する予定だ。

実現すれば、久しぶりの農外からの新規就農者となる。就農後も営農や生活が安定し、町に定着できるよう関係機関が連携し、継続して支援していくことが必要だ。

〈取材後記〉

北竜町には、前向きな若者の挑戦を後押ししようという土壌があるように感じる。かつて農協の青年部が除草剤を使わない水稻生産に取り組み、「安全な食糧生産に関する決議」を農民集会に提出した時もそうであるし、今、戦隊



農業体験宿泊施設「うえる・かる」

ヒーローに扮して特産品や町をPRし、町を盛り上げようというチーム・ノースドラゴンの活躍にもそれを感じる。多くの人が述べているように、人口減少は確かに大きな問題だが、何よりもそこに住む人々の気持ちのありようが重要だ。「人は減っていくけれどもこの町を何とかしたい、盛り上げたい」そう強く思う人たちが主体的に行動し、町を元気にしていく。若い世代がその中心で活躍しているのは頼もしい限りだ。

(北竜町・JAきたそらち北竜支所には、取材の対応、資料や写真の提供、原稿の確認など多くの協力をいただきました。)

一般社団法人 北海道地域農業研究所
特別研究員 三津橋 真一